



Title	〈図書紹介〉 横川公子編『大村しげ 京都町家ぐらし』
Author(s)	伊東, 徹夫
Citation	デザイン理論. 2007, 51, p. 96-97
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/51157
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

横川公子編

『大村しげ 京都町家ぐらし』

河出書房新社 2007

伊東徹夫／京都市立芸術大学

大村しげ（本名・大村重子。1918～1999年）は、一般には、「おばんざい」、「京都の町家における暮らし」などをテーマとした著作やメディア活動で知られている。しげが1935年以来主な住居としていた姉小路寺町東入の長家に残した遺品は、歿後の2000年に国立民族学博物館に寄贈された。その大村しげコレクションは、生活用具や新聞など14,542件45,218点にのぼる膨大なものである。

本著は、「Ⅰモノと暮らし」、「Ⅱおばんざいの発見」、「Ⅲしげの一生」という構成となっている。「Ⅰモノと暮らし」においては、資料を「衣食住」、「季節の行事」、「信仰生活」、「近所づきあい」、「趣味娯楽」に大分類し、さらに、たとえば「きもの」、「雛祭り」のように小分類し論じている。我々が博物館施設などで目にする近現代の生活文化資料の多くは、さまざまな家で使われていた物の集合である。それに比べて、一人の人間によって使われてきた物からなる資料のもつ価値の大きさと多様さに圧倒される。「Ⅱおばんざいの発見」においては、今や京都の貴重な観光資源にもなっている「おばんざい」が、しげ達によって、どのように「発見」され、発信されていったかが、様々な角度から検証されている。「Ⅲしげの一生」においては、戦後、雑誌や新聞へ政治的・社会的な内容の投稿を行った女性の先駆的存在であったしげが、1960年代から京都の生活文化の一種カリスマ的な紹介者になっていった変化についての記述が興味深い。

一人の人間の生活道具の集積と、大きくうねる時代を生きぬいて影響力のある随筆家と

なった女性の人生の関係について、12人の著者が様々な角度から興味深い分析を試みている。写真図版が多く掲載されており、楽しく読むこともできる。

本著は、国立民族学博物館共同研究と、文部科学省科学研究費補助金による研究成果の一部として編集されたものである。前者の報告書として、『国立民族学博物館調査研究報告書68 モノに見る生活文化とその時代に関する研究——国立民族学博物館の大村しげコレクションを通して——』（横川公子・笹原亮二編。2007年3月。資料目録・資料写真CD-ROM付き）があることを付記しておく。



